

## 総合的な学習の時間の指導力向上及び実践研究の在り方について

宇佐見香代 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード : 総合的な学習の時間 指導力向上 実践研究 教員養成・教師教育

### 1. はじめに

平成28年の教育職員免許法の改正によって、総合的な学習の時間（以下総合とする）の指導法に関する科目やこの項目を含んだ科目の開設が求められることになった。探究型学力の育成をめざすこの領域の指導に当たって、教師は「学校が地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習」をつくりだすことを求められており、併せてカリキュラムの開発や改善、参加型・体験型の授業の設定とその指導など、従来の教科の学習指導の範疇を越えるところの専門性や実践力が要求されている。

筆者は、本学の教育学部専門科目として「総合学習の原理と方法」を開講している。こちらは隔年開講の専修専門科目であり、必修科目ではないため受講生は少なく、10名を切る年度も少なくないが、総合学習に興味のある学生が受講している。この科目では、平成12年の総合的な学習の時間の実施以前より、我が国の学校教育とその改革の展開の中で実践されてきた教科横断的な学習の性質をもつ領域も総合学習として扱うこととし、総合学習の原理と歴史的展開を辿る内容や実践事例・実践研究の成果を紹介する講義を行っている。併せて、学生と相談しながらテーマや課題を設定し、実際に調べ学習やフィールドワーク体験学習を行ったり、指導上の課題について検討して発表を行ったりして、授業を展開させている。

また、設置から4年目を迎えた埼玉大学の教職大学院において、筆者は「教育課程の課題探求（共通科目）」「総合学習カリキュラム開発演習（コース選択科目）」を担当している。院生定員20名のうち、半数の10名が埼玉県・さいたま市の現職派遣教員である。本学教職大学院の特色としては、ほとんどの開講科目で、学卒院生と現職院生が共同して学び合う授業を実施している。これらの授業では、例えば、生活科や総合的な学習の時間について、学習指導要領の目標・内容や教育課程編成に関わる理論及び実践を踏まえて、総合の単元計画をグループで作成し、院生と共に総合のカリキュラム開発や改善について、さらに指導上の工夫や課題について探求することになっている。

これらの筆者の教員養成・教師教育における実践の中で、この領域の指導力向上や将来の学校現場での実践研究の力量形成に向けて課題と思われるところを整理していく必要を感じている。本論では、まず総合的な学習の時間に関する教師の指導力・カリキュラム開発能力に関する研究として、まずはこの領域の実践で教師が抱えている困難や課題について、受講生の実態も含めて検討する。続いて、筆者が大学で担当しているこの領域の授業実践について振り返り、受講生のこの領域の専門性の向上について教師自身が自らの実践を対象化して実践研究を行えるようにするためにどうしたらいいか、検討していく。

### 2. 学部専門科目受講生の総合的な学習の時間の学習指導力向上にむけて

#### 2-1 受講生の総合的な学習体験の振り返りと総合の実践上の課題

大学のテキスト『総合的な学習の時間の指導法』（2018）の開発プロジェクトを主導した村川は「はじめに」で以下の様に述べている。

「ある日のこと、勤務先である甲南女子大学のゼミ生に脅された。『私たちはまともな総合を経験していない。このままだと教師になっても同じことをしてしまう』と。（中略）鳴門教育大学をはじめ、他の大学でも非常勤講師をしているが、同様の反応で、総合の存在意義までも疑問視している学生は少なくない」<sup>(1)</sup>

同様に、本学専門科目の受講生の総合の学習体験を振り返りの中で、筆者が特に課題として挙げたいのは、受講生に、「よい総合の学習体験」が乏しいこと、さらにいえば総合の学習イメージ自体がないことである。以下は、本学「総合学習の原理と方法」平成30年度の受講生の振り返りのコメントである。受講の最後に、自身の総合の経験を振り返ったコメントを中心に抜粋する。

- ・私は今まで、総合的な学習の時間は何のためにあるのか分からなかったし、小学校はパソコンが使えるようになるだけだった。中学に関してはまったく覚えていない。
- ・自分の今までの総合といえば、クラスの係決めか席替えの時間ばかりに使われていて、このような充実した総合学習を体験したのはほぼ初めてである。
- ・「総合学習の原理と方法」を取るまでは、総合を授業で学ぶということが本当に頭になかった。総合学習の授業を取らずに先生になる方も多くいることを考えると、本当に危ないと思います。
- ・問題発見→解決のプロセスを考えるとということは学習の基本なのではないかと考えるので、これから一層総合が充実すべきだと感じたし、総合について教師が学ぶことも大切だと思った。学んでいない年代も是非今からでもやるべきだ、と思った。
- ・私の通っていた高校は、総合を『理数的／科学的探究の時間』と称し、別の科目で代替していた高校だった。そのため、自分の中で総合には「探究」「好奇心」といったキーワードがある、いわば自習のような印象が強かった。
- ・調べ学習を行うことが悪いというわけではないが、教師が決めたテーマに即して学習を進めるのでは、総合の本質を見失ってしまうのではないかと。私たちが小・中学生の時代に、こういった学習をしてきたことが（他の学生の）発表内容で見て取れた。私たちがその再生産を止めなくてはならないことは間違いないだろう。
- ・今回総合に関する授業を受けることができ良かったです。私はあまり良い総合の授業を受けた記憶が無いので、私が教員になった際には今回の授業を思い出そうと思います。今の旬の話題や身近にある問題や危険など、様々なことに柔軟に目を向け、教材として取り入れたいです。良い総合の授業ができる教員になりたいと思います。

以下は、平成20年の学習指導要領改訂に際しての議論をまとめた「生活・総合的な学習の時間専門部会におけるこれまでの主な意見」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間専門部会）より抜粋した、総合的な学習の実施における問題点や課題である。

#### 【問題点・課題】

- ・しっかり取り組んでいるところとそうでないところの差が大きい。
- ・学校は、総合的な学習をどう組み立てるかということより、どうやってこなすかということに腐心しているように感じる。全体計画を立てるにしても、十分な議論がなされているのか、また、地域の願いがそこに入っているかが疑問である。
- ・教科の学習と総合的な学習を分けて考えているという感じを受ける。教科と総合的な学習の間にフィードバックや連動性が余り感じられない。そのことが、保護者の「総合的な学習に時間をとられて、学力が下がる」といった反応につながっているのではないか。
- ・総合的な学習の時間について、教育関係者であっても認識が十分でない。教師の適切な指導が一部改正で盛り込まれたが、ねらうところのまだ半分くらいのところでとどまっていないか、もう一步踏み込むための適切な指導とはどういうことかかんがえていきたい。
- ・うまくいかない学校が、なぜうまくいかないのかを分析する必要がある。マスコミの報道を受けて、現場が混乱するのは、総合的な学習に関して理解が統一されていないということである。
- ・学力低下とよく対比されるが、総合的な学習は、正しく運用できれば、学力低下を救う道として非常に効果的な面をたくさんもっている。しかし、現実にはそうとらえていない教員も多い。わかっている人がいる学校ではなんとかなるが、そうでないところはお茶をにごすような実践になっている。
- ・総合的な学習の時間が何を目標しているかということが現場に十分理解されているかということが課題である。教育関係者だけでなく、保護者を含めてわかるようなものにしていく必要がある。
- ・「総合的な学習の時間」の実施に当たって、その充実のために、学校の中で、校長、教頭、研究主任、教務主任といった立場の職員が力量をもち、リーダーシップを発揮しているのか。十分なリーダーシップが発揮できていない学校も多いのではないか。
- ・なぜ混乱するのかというと、我々大人が体験の意味がわかっている教育を受けていないわけで、そういうリソースがないからである。従って、体験が大切だと説明するだけでなく、教員に体験させる場をもっと与えていく必要がある。
- ・なぜ現場でうまくいかないかということは、きちんと分析する必要がある。確かにマネジメント能力の問題や教師の指導力による部分もあるが、家庭や地域の教育力の低下からさまざまな課題が学校へ集中するなか、生徒指導にかなりの時間を取られ、教科の指導も行いつつ、さらに「総合的な学習」の準備にあたる教員の現況も踏まえなければならぬ。それを踏まえた上で、サポートの方法を考えなければならない。
- ・現状では、教育委員会に「総合的な学習」の指導主事がないことや学力の問題がクローズアップされたこともあって、「総合的な学習」をテーマにした教育研究に取り組む学校が減り、「教科」の研究へ移行する傾向が強い。教育委員会の姿勢も問われている。
- ・教員は長年、指導書と教科書が提供され、何もしなくても教える環境が整っていた。総合は、自分で考え、内容もつくり、運営も考える。こうした経験がこれまで教育現場になかったことが進展しない大きな要因だと思われる。改善のためには、大学の教員養成、教育センター、指導主事の役割など、対応できる変革が必要だと考える。さらに、コーディネーター、マネジメント力が先生たちにないのであれば、専門家との連携も必要となる。
- ・一部の教員に負担がかかっているということはないか。総合的な学習の時間を運営していくために教員はどれくらいの時間をそこに注がなくてはならないのか、どのように教員を配置すれば

効果的な運営ができるか、現状のスタッフで、教科もやりながら、果たしてそれができるのかを考える必要がある。

・総合的な学習は基本的に横軸であり、各教科の教員がその枠を超えて情報を共有しあって学校全体で軸を決めるということが求められる。現状では教員が個人で動いているという状況があるように思う。

このように総合の実践の状況から、筆者が本学での総合に関わる科目を実施する上で、以下の様な課題を意識してきた。まず、第一に、受講生に総合的な学習の時間の学習体験を改めて踏ませるプロセスを取ることである。上記のコメント以外にも学生との対話で感じるところとしては、小学校よりも中学校、中学校よりも高等学校の方が、総合の実施に問題があるように思われる<sup>(2)</sup>。今回の学習指導要領の改訂で、高等学校段階の総合は、「総合的な学習」から「総合的な探究」へと科目名称が変更となり、高等学校段階の改訂では他の科目においても「探究」学習の導入が進められている。体験的探究的な学習の展開を文字通り体験することの必要感を科目実施のなかで強調することにした。

第二に、カリキュラムを開発し改善する力量の形成を図ることである。学習指導要領によって学習内容が提示され、教科書を使用して授業を展開する教科とことなり、総合的な学習の時間等のいわゆる領域における学習内容については、各学校の創意工夫に任されている。各学校の実情を反映した学校教育目標に即して、育てるべき資質能力を明確にし、指導計画を学校全体で作成する必要がある。学校現場における従来の授業研究や実践研究は、どちらかという各教科レベルあるいは各授業レベルの分析検討を行うことが多く、教師一人一人の授業実践力を問うものが大半であったように思われる。総合においても、それぞれの教師の指導力授業実践力の向上を図ることは言うまでも無いが、一方で教師一人一人がそれぞれの専門性を発揮し役割を明確にしながらかつて協働してカリキュラム開発や実践に当たる必要がある。特に中等教育においては、教科の枠を越える学校内外の協働が求められており、授業研究や実践研究の局面においても共同研究を組織し展開する力量が問われていると考える。

## 2-2 総合的な学習の時間の指導力向上の必要とその困難

平成10年の学習指導要領改訂によって創設された総合的な学習の時間は、一般の教科とは異なり、学習内容は例示として示され教科書は作成されていなかった。指導計画の作成と実施に当たっては、カリキュラム開発から取り組む必要があり、教師の負担感が大きいことは創設当時より指摘されていた。

総合については、学習指導要領には初めは総則の中に記載されていたものが、平成20年の学習指導要領より、他教科領域のように独立して記載されるようになったが、どの学年で何を学ばせるのか、については記載をすることがないのは、各学校が、地域や学校、児童・生徒の実態に応じて、創意工夫を生かした特色ある内容に取り組むことが期待されてきたことによる。しかし、教員養成段階で総合的な学習の時間についての基礎的理論的な内容を学ぶことがなく学校現場に入った教員は、まずはこの教科の理念について学ぶことから始める必要があった。従来の知識技能を習得することで育つ学力を育成する授業を、学習者中心で主体的探究的な学習を展開させるような授業へと転換させる必要があった。教師には、カリキュラムを改善することや開発することを支える専門性に乏しく、学校現場においてもカリキュラムを一から開発していく余裕がない

中で、総合的な学習の時間が導入され実施されるなかで、上記のような様々な問題が指摘されるような事態が生じていた。

平成29年に改訂された学習指導要領では、すべての教科等の学力が、資質・能力の三つの柱で説明されることになった。しかし、総合的な学習の時間については、前回の平成20年の改訂の際に、「育てようとする資質や能力及び技能」を各学校で設定していくことが求められていた。奈須はこの点について、総合は「二〇一七年版学習指導要領を先取りしていたといっている」と指摘している。さらに、「これからの総合的な学習の時間では、一歩先んじて進めてきた汎用的な資質・能力の育成という方向性を引き続き大切にするとともに、領域特殊的な知識及び技能を明確に意識したカリキュラムづくり、授業づくりに力を入れていきたい。そのことが結果的に、思考力をはじめとする汎用的な資質・能力のなお一層の充実につながっていく」と述べている<sup>(3)</sup>。このほかにも、「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメントの推進」など今回の学習指導要領の改訂に際して示された学力観授業観の理念的な転換を踏まえて、総合の実践を展開していく上で、総合の指導力向上と実践の充実は欠くことができないものであると考えられる。受講生の総合に対する理解をさらに深め、その重要性を認識させることを出発点とし、指導力やカリキュラム開発力を向上させるための教員養成・教師教育を進めていく必要がある。併せて、学校現場においても、この領域の実践を改善し発展させていくための実践研究の力量を育成する必要があると考える。

これらの課題を踏まえて、これまでの本学における筆者の教員養成・教師教育実践を以下振り返る。

### 3. 埼玉大学教育学部専門科目における受講生の総合的な学習についての理解の深化と指導力向上に向けて

#### 3-1 平成28年度の「総合学習の原理と方法」の実践

平成28年度後期に担当する学部専門科目「総合学習の原理と方法」においては、上記の課題を克服するために、①フィールドワーク体験学習の導入 ②グループワークを多用したカリキュラム開発と発表の導入を含め、以下のような実践を行った。

平成28年度に実施したこの科目では、「情報」を大テーマに、前半は総合学習に関する理論の学習とその実践の深化に向けて必要な事項について講義形式で学び、後半はテーマに即して、調べ学習、フィールドワーク、発表などを行った。学習テーマについては、開講年度毎に受講生と相談して決めることが多く、これまでに国際理解教育（インド）、ものづくり（紙）など、授業担当者と受講生が協議しながら決めていた。平成28年度の受講生は学校教育臨床専修3・4年生学生11名と他専修2名の13名で、後半に向けて3グループに分けて学習テーマを設定させ、グループワークを多用して展開した。

#### 【グループの探究と発表のテーマ】

A班：メディアとコミュニケーション

B班：情報の発信と受信・・・今回の紹介事例

C班：批判的思考力の育成について

学習テーマを設定した後、NHK スタジオパークにてフィールドワークを行った。フィールドワー

くに赴く前と後とでは以下のように受講生の課題意識が変化している。

【前】学習課題の構成時の各々の関心は、「情報源や情報の信ぴょう性をどのように判断すべきか」、「情報とメディアを理解するための教育はどのように行うべきか」、「そもそも情報とはなにか」、「メディアに対する批判的思考力を養うためには」という事項に集中していました。また、話し合いの中で、「情報の発信と受信」という大枠のテーマを決め、それについての知識を得ることを目的として、NHKスタジオパークへフィールドワークを行うために向かいました。

【後】フィールドワークでは、メディアが番組ごとに視聴者の世代に合わせて取り扱うコンテンツや内容を変化させていることに気づきました。また、スタジオパークから放送している番組『スタジオパークからこんにちは』を見学した際に、カメラワークや演出など多くの発信者の技術の存在に改めて気づきました。それらによって操作されるメディアの情報の影響力の大きさ、商業放送・公共放送・国営放送の違い、また海外と日本のメディアの違いなど、新たな視点から課題意識を持つことができました。私たちはフィールドワークの振り返りとこれまでの考察を踏まえながら、テーマである「情報の発信と受信」について捉えなおしを行いました。情報機器の普及が進んでいる今、私たちは情報を享受するだけでなく、情報の発信者としても主体的にメディアに関わっています。しかし、情報を発信・受信する際に注意・配慮すべき事項について深く認識したことはないのではないかと考えました。そこで、「情報の発信と受信」に関する身につけておくべき事項、つまり情報に関する私たちの権利と義務、それをはぐくむことができるような学習活動について考察することとなりました。

総合的な学習では、課題設定を学習者自らが行うことが求められるが、フィールドワーク体験学習における様々な気づきによって、学習者の課題意識が深化しているのがわかる。また、情報に関わる自分自身の生活を振り返ってそこから「情報に関する私たちの権利と義務」という新たな学習課題を得ている。それぞれの関心によって探究した成果をもちより、グループで共有したところが「批判的思考力の役割と育成」であり、フェイクニュースをテーマにした学習活動案の作成と発表につながった。

次に、グループ発表に際し、NHKのニュース解説を担当しているある解説委員をゲストスピーカーに招き、発表に対するコメントを頂くことができた。解説委員になるまでの記者としての取材体験やメディアの最先端で活躍する専門家の講演で生の声を聞くことは、受講生にとっては大変貴重な学習体験となっていた。

・ニュースを発信する側がどのように客観性をもたしているのかについてよくわかりました。しかし発信者がいくら客観的に伝えようとしても、受信者がフィルターをかけてみるとどうしても主観的なものになってしまうので、受信者側も意識的に多角的な視点、多様な意見を知らうとすることが大切なのだと感じました。また今の時代、様々な手段で情報が拡散していくなかで、情報源をきちんとたどらないとすべて同じ情報源だったということもあり得るのだとわかりました。情報は身近なものであるがゆえに、あまり深く考えたことがなかったのですが、今回、このような機会を与えていただき、情報について考えるととても良い時間となりました。スマートフォンやSNSの普及など、ここ10年だけでも情報を取り巻く環境は大きく変わり、これからも絶え

ず変化していくと思います。私も考えることをやめずに情報とかかわっていきたいと思いました。

・講演を聞いて、〇〇さんの情報を収集する、発信するということについての意識の高さに非常に感銘を受けました。紛争地域において正確な情報を収集するというためにとる行動やその情報を、日本のみならず必要としている人々に伝えるために様々な活動を行われていたことは、情報を得るということ・情報を伝えるということが、単に一瞬の中で即時性を持っている状態で行われているのでは無いということ学ぶことができました。お話を聞いていく中で、私は、〇〇さんの解説委員という現在の役職と教師との一端の共通性を感じました。聴き手に対して、自らの有している情報を正確にわかりやすく伝えるということです。

・(ゲストスピーカーのコメント) 私たちが今いるのは「情報の激流」の中。ネット上には無数の情報が氾濫し、価値の高い情報であれ虚偽や悪意の情報であれ、発信者の意図を超えて不可逆的、爆発的に拡散していくことも。そうした時代だからこそ本物をどう見極めフェイクをどう見破るかは個人にとっても社会にとっても益々重要になっています。このたび埼玉大学にお邪魔し、そうした問題意識を共有する教授と学生たちがいることに勇気づけられました。「激流」に溺れ一見立派に見えるニセモノに飛びつくことなく、冷静に真の情報をすくい取る確かな目が養われることを願ってやみません。

なお、これら一連の探究の過程で得られた学習成果と学生の振り返りの感想などをニューズレターにまとめ配付した。

このように、受講生は学習テーマを設定し、受講生を伴ったフィールドワークを行い、体験学習の意義について実践的に検討し発表会を行ったが、受講生はそこで深化された課題意識を元に学習テーマに関する探究的な学習を進め、特に自身が設定した課題をさらに焦点化して深く探究しているものがみられた。将来教師になる学生に対し、自身の学習体験を越えて、総合における探究的な学習の過程を辿らせ、さらに将来の総合のカリキュラムを開発して行く上で必要な事柄についても体験的に学習することができたのではないかと考えられる。総合に対する意識だけでなく、学力観や授業観を深化発展させていく教員養成の在り方や実際について検討する必要も感じている。

### 3-2 平成30年度の「総合学習の原理と方法」の実践

平成30年度の開講では、2年生から4年生まで50名近くの受講登録があったのは、学部改組によって専修の規模が拡大したためである。受講生が増えたので、この年度は前年度までのように、「情報」のような統一的な学習テーマを設定しなかった。多様な総合のテーマの事例を示してそれを参考に受講生にテーマを考えさせ、まずはウェビングの手法などを示して個人で単元構想図を作成させ、ランダムに設定したグループ内で発表させた。さらにグループのテーマを設定し、グループあるいは個人でフィールドワークに出かけて単元構想図を作成し、グループ毎に発表を行った。以下は、グループ発表のテーマの一覧である。

- ①新しい学校行事を作ろう
- ②昔の道具と暮らし
- ③防災について考えよう

- ④川とわたしたちのくらしの関わりについて知ろう
- ⑤2020年オリンピック応援隊
- ⑥ゴミについて考えよう
- ⑦世界に広がるインスタントラーメン文化をみてみよう
- ⑧埼玉県の新名産品を作ろう！
- ⑨お米はともだち
- ⑩町の安全なところ 危険なところ

このような学習活動のなかで、受講生は総合的な学習の意義をどのように受け止めたのか、以下コメントより抜粋する。

・私は最初「総合」というものに対して「何かを調べるもの」というイメージが強くありました。しかし、総合の単元ができるまでの流れや観点を学ぶ中で「総合はどうあるべきか」というとても大きなテーマを考えるようになりました。実際に自分で単元をつくってみて、想像していたよりもはるかに難しく、何を学習材として取り扱うかから悩みました。学習材が決定して次に活動内容について考えましたが、他教科とのつながりをどのような形で取り入れるか具体的に考えながら内容を決めました。それをグループで発表したとき、自分とは全く違うテーマをみんな考えていて、総合の単元を変えた学習の意義を感じました。総合で取り上げるテーマは、日常生活の中にあふれていて、教師となって実際にテーマを考えるときには、教師自身が興味関心をしかりと持つ必要があるなと思いました。総合といたらこれ、と決めずに、社会や学校の様子から、子どもたちがこんな力があつたら良いのではないかと考えていくことがより良いテーマ設定へつながると思いました。総合を通して、各教科のつながりがどのような形となって学習やその他の面につながるか考えることも総合のおもしろさではないかと思いました。

・最初はカリキュラムを作るのはとても大変だろうなと思っていたのですが、作っていくうちに楽しくなってきた、実際に子どもたちに向けて行ってみたいと思うようになりました。これから子どもたちと触れ合う機会が多くあると思うので、この講義で学んだこと面白い感じたものを伝えていきたいと考えています。

・単に調べて発表するだけで終わらないような活動にしようと心掛け、体験活動を多く盛り込んだが、まだまだ足りないと思った。子どもたちが知りたくてたまらない、調べてみたくて、見てみたくてたまらないという探究的な意欲を持てるようにするためには単元の導入部分を工夫しなければならないと思った。

・グループ活動で話がどんどん深まったり、広がったりしていくのがすごく面白かった。それは先輩方の力が大きいと思った。必ず身近な例から入って自分の意見を述べていた。これは児童にも活用できることだし、私も改めて意識していきたいと思った。

・最終の発表をみても、同じ総合についても様々な切り込み方があり、新たな発見をすることができた。何をするにしても、児童が興味関心をもたないと学習をすることができないだろうから、自分自身の案だけでなく児童たちの意見を多く取り入れられたら良いと思った。

・この授業を通して、子どもたちにどんな能力を伸ばしてほしいのか、そのためにどういった活動を考えてあげられるか、といった見方が身に付いたように感じます。授業は子どもたちのためにあり、教員はその支援者であることに改めて気付く大変貴重なきっかけになったと思います。



・自分が子どもたちに教えられることは何なのか、自分の専門性についてよく考え、自分らしい総合の授業を行いたいと思う。

フィールドワークやグループワーク、発表などには、多くの時間と労力を費やすが、受講生の中には、総合に対する認識の深化発展だけでなく、学力観や授業観の問い直しや具体化、さらに将来の自身の教師としての在り方にまで言及しているものが見られた。

#### 4. 教職大学院の受講生の総合的な学習の時間の学習指導力向上にむけて

##### 4-1 埼玉大学教職大学院共通科目「教育課程の課題探求」における総合についての取り扱い

教職大学院の役割は、ミドルリーダー育成を通して学校全体を見通して発展させることを目指すものであり、修了後は、カリキュラム・マネジメントなどを通して、教師集団全体を見通した教育課程改善や授業改善を推進するなど、自身の力量形成だけでなく学校経営への積極的な参画や同僚への好影響を期待されている。大学院段階でのこの領域の専門性向上にむけた教育内容や在り方について考える必要がある。

まず本学の教職大学院の共通必修科目「教育課程の課題探求」において、学習指導要領改訂の理念などの講義やディスカッションを行った。この度の改訂で強調されている視点として、①社会に開かれた教育課程の在り方、②育成すべき資質能力、③チーム学校の在り方とカリキュラム・マネジメントの必要性、④教科の見方・考え方の新設、⑤主体的対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の創出などについて扱った。その後、現職院生と学卒院生が共同し、校種や教科の専門性を越えて総合のカリキュラム単元構想図を考えるグループワークを行ったが、受講生にとっては総合のテーマ設定自体の重要性や難しさが実感できるグループワークとなった。作成した単元構想図（単元計画）はポスターにし、ジグソー法によって発表をおこなった。以下は、この授業の振り返りコメントからの抜粋である。

・本講義で学ぶまで、カリマネとはどんなものなのか全くつかめなかった。しかし、この場で（現職の）先生方や仲間と学び合うことで学校の実情に合った子どもたちの変容や成長のための教育課程の編成がこれからいかに重要かを深く理解した。私はまだ実習等でしか教育現場に出ることがなく、教育の難しさや取り組みの実行可能範囲などについてはきちんと理解できていないけれど、現在の課題を解決するためには、カリキュラム・マネジメントやチーム学校という考え方が必要であると思う。本講義で学んだ知識と経験を生かして新しい学校づくりに貢献して行きたい。

・グループワークでは、子どもの姿を考えながら総合の単元構成を考えることの大切さを学びました。教員から指定された内容で子どもたちに深めさせがちになってしまうとおもうのですが、この授業を通して子どもの姿を捉えそこから授業を仕組むことの難しさと大切さを学びました。総合に限らず、他の授業でもこのやり方を大切にしていきたいと思います。

・私の班では、〇〇先生のリーダーシップの元、班員全員でアイデアを出し合い話し合っ内容をまとめることができました。先生方から現場の話を聞くことは大変意義あるものであり、それを踏まえて発表に生かすことで、マネジメントの観点から考えて行くことの大切さを学びました。また、チーム学校となっていくために同僚性や地域保護者との連携が重要であることもわかりました。

・グループ発表に向けた準備や発表が特に印象に残っています。特に、今まで特別支援教育に関わって来たので、特別支援教育に関わる教育課程についての知識のみで偏りがあった分、校種専門を問わず、皆で一つのものを作り上げたその過程はとても学びが深く、自分の識見が広げられた感じです。ストレートマスターと一緒に準備しながら少しずつ実感してきたことは、「若手のやりたいことをどうサポートできるか」ということです。教職大学院ならではの学びの発見をこれから現場に戻ったときに、ミドルリーダーとして発揮できたらと思います。教科横断的な視点を持つこと、カリマネは校長のみが行うのではなく、学校全体で取り組んでいくので、自分も担い手であると言うこと、これらを大切にしたいと思いました。現場ではじっくり学ぶ機会が少ない理論のところからじっくり学ぶことができたので、理論と実践の往還ができる教師となれるよう今後精進していきたいと思います。

・グループワークの中では、カリキュラム・マネジメントを実際現場にいるような感覚で意見を出し合い理想の学校の実現に向けてチームとして活動することができた。チームで一つの事に取り組むことの意義を実感することができ、今後の自分の教育活動に大きく影響するだろうと感じている。講義の中で、まず教師が広い視野と知識を持つことが大切であるところ、そしてチームとして一丸となり、学校、地域、社会で子どもたちを育てることを学ばせて頂いた。この講義で学んだことを生かし、常に学び続ける教師でありたいと思います。

本学大学院の特色である共同的な学びの実現と理論と実践の往還など、受講生の中にはこれらの具体的なイメージを辿る学習が成立していたのがわかる。しかし、このような学習が展開できたのは、現職 10 名学卒 10 名の計 20 名前後の学生定員で行っていたことがその背景にある。現在、教職大学院への一本化によって、学生定員が増え、現行のような授業展開が困難になることが予想されており、人数が増加した場合でもこのような成果が得られるようにするための工夫を今後検討していく必要がある。

#### 4-2 実務家教員による実践事例紹介・分析

本学の教職大学院の科目は、現在実務家教員と協働で担当する科目が多い。選択科目の「総合学習カリキュラム開発演習」では、前半を生活科や総合の理念と課題を講義し、実践事例を元にディスカッションを重ねた上で、後半は受講生が立てた課題に基づいて発表及びディスカッションで進めていく。実践事例の紹介は、筆者が研究対象としている奈良女子大学附属小学校のしごと学習や富山市立堀川小学校・伊那市立伊那小学校、南多摩中等教育学校などの総合の実践研究推進校の事例を紹介した。一方、ペアの実務家教員には、自分が計画や実施に関わった過去の総合の事例を元に講義をお願いしている。これまでにペアとなった実務家教員は、埼玉県教育委員会が派遣した交流教員であるが、紹介していただいた事例は彼らが本学附属小学校教諭時代に実践したものであり、こちらも研究的先進的な視点を含むものであった。筆者の事例紹介との違いは、実践者自身が自分の実践した事例を振り返り語る点である。本学附属小学校は教科担任制であり、実務家自身総合は専門ではなかった、とのことであるが、それでも試行錯誤しながら総合の実践を重ねていく過程はまさにカリキュラム開発と改善の事例となっていた。上手いかなかったところ、失敗から改善したところなど、実務家教員は率直に語り、また受講生は実践者に直接質問を重ねることができ、そのディスカッションは研究者教員も関わりながら探究を深めることができたのも、学部の授業では扱えない内容であった。とりわけ昨年度今年度の事例として扱

われたのは、附属小学校と特別支援学校の交流学习の事例であり、このような交流学习を構築できる他校種教員との連絡調整や連携の在り方についても検討できたのが、特筆できるところである。

さらに、この科目では附属小学校教員をゲストスピーカーとした講義も取り入れながら展開していたが、今年度は附属小学校教員とのスケジュールの調整が上手くいかず、思い切って受講生とともに附属小に出向いて生活科の授業参観と振り返りを行った。中学校教員志望の学生や中学校現職教員も含まれていたが、本学教職大学院の特色として、むしろ異校種連携を進めることができる専門性を培うことを今後も展開させていく必要性を感じた。

このように、教職大学院での授業展開においては、実務家教員や附属学校教員の果たしている役割が大変貴重で、研究者教員との協働がより授業展開の中で深まっていくよう今後も努力したい。さらに、実践研究の専門性をもっている附属学校教員が教職大学院における教育活動により関わることができれば、院生の実践研究力の向上に資するところが多いと思われる。実務家教員や附属学校教員の負担増にならないように、しかし有機的に教職大学院や学部専門教育により関わられる様にするための工夫を今後も模索していきたい。

#### 4-3 教職大学院受講生の発表より

次に、令和元年度実施の教職大学院選択科目「総合学習カリキュラム開発演習」においては、受講生自身が生活科や総合の実践上課題となると考える点を元に個人研究の発表とディスカッションを行ったが、特に現職教員院生の発表には、勤務する学校現場でのこの領域の実践上の問題点がリアルに表現されており、学卒院生と共にこの問題を解決するための手立てや改善点についても考えることになった。学卒院生は、自分の個人研究のテーマと総合との連関を意識して個人の探究を進めたものが多く見られた。

以下は、現職教員が個人発表を行った内容のうち、上記の特色をよく示したものを抜粋した。

発表 1：勤務校（小学校）の教員と子どもたちに総合についての意識や課題を質問紙形式で調査し発表した例

【対職員】総合の指導は好きか、嫌いか？

好き 14% 嫌い 86%

好きな理由：学校行事と関連させていることで子どもたちが前向きに取り組んでいる、ICT 機器を用いることが多い、子どもが工夫しながら活動している

嫌いな理由：地域のことを知らない、調べる内容が決定している、子どもの主体性を生かすことが困難、諸機関との連携をとる交渉が大変、調べ学習における情報の取捨選択が大変、子どもへの情報提供をする資料収集が大変、指導の仕方がよくわからない、まとめ方への指導が苦手

【対児童】総合は好きか嫌いか？

4年生 好き 87% 嫌い 13%

5年生 好き 88% 嫌い 12%

6年生 好き 88% 嫌い 12%

好きな理由（発表内容より筆者が抜粋）

：調べるのが楽しいから、詳しく知ることが楽しいから、様々な体験活動ができるから、みんなと活動できるから、情報機器を使えるから、勉強とは別物な感覚、課題をもって取り組むことができるから、新しい発見があるから、ローマ字を使って覚えることができるから、調べ学習をもとにまとめ発表することが好きだから、話を聞く時間が少ないから、ポーッとされているから

嫌いな理由 (抜粋)

：ローマ字を打つのが嫌い苦手だから、調べたりインタビューをしたりするのが嫌いだから、生物が苦手だから、探したいものがうまくみつからないから、調べるのが面倒だから、課題が決まっているから (自分に調べたいことを調べたい)

発表2:勤務校ですでに決まっている総合の学習計画を元に「今まで通り:毎年こうだからね～」と「ちょっとだけイノベーションしてみた:なんか今までのやり方ではつまらない」を比較した例。同じ指導計画でも、教員の意識の違いで、学習展開の充実度がちがうのではないか、という提案

【今まで】「総合どう進めます?」「なんだかんだで忙しいから、今まで通りでできるだけ端折りましょう」

「テーマを早く決めなさい、この1時間で決めなさい」じゃあ、これでいいや

「まだ資料見つからないの、はやくやりなさい」その本写させて、写すのつかれた、テーマ変えたい

「模造紙破かないで丁寧に書きなさい」「声が小さい、紙を見ないで発表しなさい」「できてなければ、業間昼休み使うしかないよ」時間ないから適当にかいちゃおう、迷っただけで1時間終わっちゃった

「調べ学習もまとめもただ書き写しただけ、強いて言えばカラフルなレイアウトかな、発表も読んでるだけだし、どうにか振り返りカードでそれらしいこと書かせて評価しましょう」

【イノベーション編】「総合どう進めます?」「今までのやり方ってつまらないのよね」「体験と自由さがありませんよね」「変えてみましょう!今流行のイノベーションよ!」

「環境、って私たちが住んでいる場所だって環境だね。WMでいろいろな考え方がだね。大きな環境と身近な環境、どちらを調べたい?」環境、っていってもみんないろいろなことを思ってるんだ、身近な環境、ってよくわからないな。

「資料、自分で用意できなかつたら、先生に相談してね」「学校の中の水質って、職員室もトイレもプールも?」「もちろん家の近くの林や畑、道路でも良いよ」トイレの水って意外とキレイ、空気が汚れるって言っても実際目に見えなかったのが見えた。大きな環境問題ってどうなってるんだろう。

「ポスターは要点だけまとめて、後は発表で補えばいいんじゃないかな。」「その劇、おもしろいね。こんな小道具あるけど使う?」「まさか、あの子がこんな発表を考えてくるなんて」ポスターならたくさんつくって学校中に貼ろうよ、空気のゆるキャラで話を進めよう。劇の時間がかかりすぎる、先生休み時間も発表練習やりたいんですけ

ど

「どの子ども意欲的な姿勢が随所に見られた。良いところをしっかりと見取って評価していきましょう。通知表の所見も書きやすいね」

この他、自校（中学校）で特別活動の時間（行事）に総合の時間を当てている中で総合の研究指定と発表が当たってしまい、各教科担当者と生々しい交渉の末に総合の時間を確保した事例などの興味深い発表があった。

現職教員院生の個人発表は、外部からの研究者教員が入り込むことができない次元の問題状況や課題を含んでいるものがあり、教職大学院の院生と大学教員が協働してそのような現場の課題に切り込んで研究を進めていく余地が多くあると感じた。同時に、教職大学院の院生が修了後にそれぞれの勤務校や地域で、総合を初めとした新しい時代に対応した教育実践と改善、それを支える実践研究に当たる上で必要な専門的力量的形成に教職大学院がどう寄与していくのかも今後検討していく必要がある。

## 5. 考察

今年度後期より、本学では学部1年生を対象に「総合的な学習指導法」を開講した。必修科目のため、受講生は1クラス90名を越えて実施する予定である。なおかつ8週1単位の講義のため、学部専門科目や教職大学院でこれまで実施してきたような展開を考えることは物理的に難しくなるが、それでも総合の指導力向上に向けての入門的な科目として展開した。学部専門教育の早い時期に、このような科目を教職科目の必修として設定できたことで、この領域の受講生の興味関心を喚起する機会を得られると同時に、学部の専門科目でのより発展的な内容へとつなげることができる。他の教科と違い、総合を専門とする専修がない中でこの領域の指導力の向上を図るためには、体系的に科目を設定する中で学生の力量形成を行っていくことが必要である。さらに、教職大学院においては、指導力の向上と同時に学校現場における実践上の課題を明確にし、その解決に向けて実践研究を通して授業改善を図っていく筋道を作っていくべきであると考えられる。

以上のように、筆者のこれまでの授業で実施してきた学習活動の振り返りから、受講生の大学入学までの総合の学習体験から生じる課題にどう対応し、将来のよりよい実践に向けてどのような専門的力量的を育てて行くのか、その試行錯誤の一端について述べてきた。また、学校現場で既にある総合のカリキュラムの改善を図り、適切な指導を行うことができるためには、学部・大学院でどのような専門的教育を行うべきか、まさに大学におけるカリキュラム・マネジメントの次元まで踏みこむことはできていない。しかし、受講生の中には、総合の指導の充実がこれからの時代を生きる子どもたちにとって必要なことであるという認識がコメントから読み取れたことは、多少の成果として考えられる。

このような検討の中で残された課題として以下の点が考えられる。この領域の指導力向上及び実践研究の深化に向けて、教員養成・教師教育の場における改善点の提示及び教員養成の在り方に資する体系的な提言の構築は未だ不十分であり、今後この内容をさらに明確にして進展させる必要があると考えている。本稿では、課題を明確にすることにとどまり、受講生の持つさまざまな課題意識に十分応えられた講義が筆者自身も実施できているとは言いがたい。新しい教科領域は、学校現場での実践研究の蓄積が少なく、継承されるべき内容も十分体系化されていない。学

校現場での実践研究の充実のために、総合の指導に関する知見を教員養成・教師教育の実践指導力育成の現場へ還元する必要があるが、教員養成・教師教育の主体としての大学教育はどうあるべきか、どのような方法で充実を図るべきかについて、今後も考えたい。

#### 引用文献

- (1) 村川雅弘他『総合的な学習の時間の指導法』日本文教出版 2018 p. 002
- (2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける議の取りまとめについて（報告）」平成 28 年 8 月 26 日

「総合的な学習の時間の本来の趣旨を実現できていない学習活動を行っている学校、進路指導や学校行事として行うことが適切であるような活動を行っている学校があるという指摘もあり、小・中学校における取組の成果の上に、高等学校にふさわしい実践が十分展開されているとは言えない状況にある。」

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377064\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377064_2.pdf)

- (3) 奈須正裕『次代の学びを創る知恵とワザ』ぎょうせい 2019 pp. 170-171

(2020年3月31日提出)

(2020年4月10日受理)